

国際交流彙報

中国文物研究所・天津大学との交流

芸術文化振興基金助成の「伝統的文化財技術の調査研究」の一環として、中国から張之平（中国文物研究所古建築保護部）、楊新（同）、楊昌鳴（天津大学建築系）の3氏を招聘した。招聘期間は1996年3月20日からの10日間。3月22日には、恒例になった「古建築の修理と復原に関する意見交換会」（第4回）を開催した。3氏の講演題目は以下のとおりである。

・張 之平「古建築木構造の維持と補強技術の規範」について」

・楊 新 「独樂寺修理工程の状況簡介」

・楊 昌鳴「皇宮形式を模倣したラマ教寺院 ～青海省の瞿曇寺」

このほか、3氏は春日大社、元興寺庫裏、如意寺、神戸十五番館、嚴島神社などの修理現場や数多くの古建築を視察し、3月29日に福岡から帰国された。5年間にわたる「伝統的文化財技術の調査研究」も最終年度を迎えたが、日中の修理技術者・研究者の交流が今後さらに活発化することを願ってやまない。

（浅川滋男）

北魏洛陽城永寧寺出土の塑像と瓦の調査

永寧寺は、孝明帝熙平元年（516）に靈太后胡氏によって建立された北魏洛陽城で最大の仏教寺院である。中国社会科学院考古研究所が1979年から調査を継続しており、1994年には文部省科学研究所補助金（国際学術研究）を受けて、奈良国立文化財研究所の2名の研究員が西門と塔の調査に参加した（『年報』1995）。1995年からは遺物の総合的整理と研究が開始され、日本側も11月2日から11月16日まで中国を訪問し、永寧寺の塑像と瓦および関連資料の調査を行った。山崎隆之（愛知県立芸術大学）は塑像の製作技術の調査を行い、中国側が從来から唱えてきた手作り説に対して、型作りを基本にし、それに範などで手を加えたという説を提示するに至った。松浦正昭（奈良国立博物館）は塔各層の塑像の大きさや組み合わせ、背景の復元を行った。佐川は瓦の文様と製作技術の調査を担当した。塔所用の蓮華化生文軒丸瓦は4種類あるので、一案としてこれらを四面ごとに葺き分けていた可能性を考えている。井上直夫（奈文研）は遺物の写真撮影を現地で行った。なお、中国語版の報告書は1996年に刊行され、日本語版は現在製作中である。

（佐川正敏）

国際シンポジウム「鍍金された金属文化財の表面科学」への参加

本国際シンポジウムは、アメリカ保存科学会（A I C）の1995年度本大会前の特別セッションとして企画され、6月4～6日ミネソタ州セントポールにおいて開催された。村上は「文化財保存振興財團」の派遣研究員として会議に参加した。「鍍金（gilding）」技法は、馬具や武具、装飾品などの金工品はもとより、彫刻、建造物も含めた金属文化財の表面を金色に装飾する表面加飾技法の代表的なテクニックであり、洋の東西を問わず古代から盛んに行われてきた。「鍍金」は、わが国では水銀を用いた金アマルガム法を指すことが多いが、“gilding”は、金箔などで覆う方法なども含めた「表面を金色に装飾する」という広範な意味を持っている。シンポジウムは、gilding技法を時代や地域別にまとめ、様々な分野から検討を試みる企画で、特に文化財保存科学、考古学、美術史、工芸史、さらには現代工学の視野をも含めた学際的な討論を行う努力が払われていた。発表は本分野の第一人者である大英博物館のアンドリュー・オディ保存科学部長の基調講演に始まり、17本の講演が続いた。村上は「日本で出土した鍍金を施された金工品について」と題して講演し、わが国出土の古代の鍍金仕上げの金工品を紹介し、その表面の微細構造を現代の技術で作成した試料と比較対照することで、古代鍍金技法を解明する糸口を探るとともに、さらに金銅製遺物の腐食のメカニズムに関する考察も報告

した。わが国の金工技術に対する欧米研究者の関心の高さにもかかわらず、わが国の情報はこれまでほとんど紹介されていなかったのが実情である。特殊なテーマではあるが、熱気に満ちた会場の雰囲気は、欧米のこの分野での層の厚さを改めて痛感させられた。シンポジウムのあと、ワシントンのスマソニアン研究機構に招かれ、フーリア美術館所蔵の青銅鏡などの調査を行うことができた。またメリーランドにある国立標準技術院（NIST）において電子顕微鏡観察を行う機会を得た。（村上 隆）

国際会議「Hidden Dimentions : The Cultural Significance of Wetland Archaeology」への参加

1995年4月26日から30日まで、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で開催された低湿地学会の国際会議に出席し、大阪平野における沖積地の遺跡の変遷について発表を行った。この学会は、ジョン・コールズ氏を代表とするWetland Archaeology Research Project（WARP）との共催で、参加者は約200名ほどであった。従来紹介されることの少なかった西海岸の興味深い遺跡の発表が印象に残った。日本からは、低湿地遺跡の保存科学、三内丸山遺跡などの発表があった。（松井 章）

国際ガラス会議第17回大会への参加

国際ガラス会議第17回大会が1995年10月9日から14日まで、北京の国際会議センターで開催された。この会議はニューガラスから古代のガラスまで、ガラスに関するすべての分野を網羅するもので、3年毎に大会が開催される。今大会は40ヶ国から620の発表があり、予稿集は3800ページに達し、参加者は1000名をはるかに越える規模であった。肥塚は今回、“Archaeology, Archeometry of Glass”の部門で“CHEMICAL COMPOSITION OF ANCIENT GLASSES FOUND IN JAPAN”と“SCIENTIFIC STUDIES ON SEVERAL ANCIENT CHINESE GLASSES”と題して2件の口頭発表をおこなった。この会議ではガラスの科学的な研究を通して、古代ガラスの国際的な交易の実態解明に迫ることができる見通しを再確認することができ、今後日本の研究成果を世界に向けて発信する必要性を痛感した。なお、1998年はサンフランシスコで開催が予定されている。（肥塚隆保）

国際会議「縄文文化からスター・カーヘー後氷期におけるユーラシア大陸の狩獵採集文化」の開催

松井は1995年9月4日より10日まで、ケンブリッジ大学とダーラム大学においてユーラシア大陸の狩獵採集文化の比較研究をテーマに、「縄文文化からスター・カーヘー」と題する国際会議を、サイモン・ケイナー、リリアナ・ヤニック（以上、ケンブリッジ大学）とピーター・ロウリーコンウェイ（ダーラム大学）らと4名で共催した。本会議は、1993年に奈良国立文化財研究所が招聘したダーラム大学講師ピーター・ロウリーコンウェイ氏が、日本の縄文文化に興味を示し、ヨーロッパと日本の研究者がそれぞれの研究成果について討議する機会を持ちたいと考えたの発端である。会議は約100名の参加者があり、そのうち日本人研究者が30名ほどを占め、日本人の少ない国際会議とは異色の構成となった。日本考古学の成果がこれほどの数、発表されたことはこれまでになかった。（松井 章）